

7. 外部評価の実施状況

日時 平成 27 年 7 月 23 日 (木) 14:00~17:00

場所 広島大学生物圏科学研究科 C 棟 1 F 第 1 会議室

外部評価委員

- ・東京大学名誉教授 會田 勝美 氏
- ・京都大学大学院農学研究科・教授 松井 徹
- ・台湾東海大学農学部・准教授 王 良原 氏

評価日程等

- 5 月 14 日 外部評価委員会委員宛に委嘱状及び評価委員会開催案内を送付
- 6 月 26 日 外部評価委員に評価資料（自己点検・評価報告書（平成 22 年度～25 年度中間まとめ）を送付
- 7 月 11 日 自己点検・評価報告書に対する事前質問状受付（松井委員）
- 7 月 16 日 質問状に対する回答書送付
- 7 月 23 日 外部評価委員会開催
- 14:00～ 研究科長挨拶（植松研究科長）
 - 14:05～ 外部評価委員紹介
 - 14:07～ 概要説明（吉村自己点検評価委員長）
 - 14:40～ 委員からの質疑応答, コメント
 - 15:15～ 休憩
 - 15:30～ 総括討論・講評
 - 16:30～ 謝辞・閉会挨拶（吉村副研究科長）
- 7 月 30 日 評価書提出
- 8 月 25 日 生物圏科学研究科ホームページに外部評価書を掲載・公表

広島大学生物生産学部・ 大学院生物圏科学研究科 自己点検・評価

第2期中期目標・中期計画期間中間まとめ
平成22年度～25年度

2015年7月23日 外部評価委員会



沿革

- 昭和24(1949)年 広島大学水畜産学部設置
 昭和41(1966)年 食品工業化学科を増設
 昭和43(1968)年 大学院農学研究科修士課程設置
 昭和54(1979)年 生物生産学部を設置(改組)
 昭和60(1985)年 大学院生物圏科学研究科博士課程を設置(改組)
 大学院農学研究科修士課程と大学院環境科学研究科修士課程を改組し、生物圏科学研究科博士課程を設置
 平成14(2002)年 生物圏科学研究科を改組し、講座化
 平成18(2006)年 生物圏科学研究科の再改組
 生物資源科学専攻、生物機能開発学専攻、環境循環系制御学専攻



資料3：教員の配置状況（H25.4.1現在）

専攻	講座	専任教員数				合計
		教授	准教授	講師	助教	
生物資源科学	陸域動物生産学	16	15	0	3	34
	水圏生物生産学					
	食料資源経済学					
	瀬戸内圏フィールド科学					
生物機能開発学	分子生命開発学	14	7	2	2	25
	食資源科学					
環境循環系制御学	環境予測制御論	5	6	2	2	15
	環境評価論					
特任教員（外国人教員内数）			1 (1)	2	3	6 (1)
合計		35	29	6	10	80
生物生産学部附属練習船豊潮丸		0	1	0	1	2
合計		0	1	0	1	2
総合計		35	30	6	11	82

（注1）留学生担当教員（教授3名、准教授1名）は、留学生（一部に外国人研究生を含む）を対象に生物圏科学に関する概論と演習を担当。また、専門の授業科目をもち、院生指導にもあたる。

別添資料4：施設・設備の整備状況

瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター

陸域生物圏部門（農場）

動植物精密実験部門（家畜環境制御実験棟・精密実験圃場）

海域生物圏部門（水産実験所）

食資源機能開発部門（食品製造実験実習工場）



練習船

「豊潮丸（とよしおまる）」



共通機器



生物圏科学研究科の教育

資料1 広島大学と生物圏科学研究科の理念と教育目的

広島大学の理念5原則

●平和を希求する精神, ●新たなる知の創造, ●豊かな人間性を培う教育, ●地域社会・国際社会との共存, ●絶えざる自己変革

生物圏科学研究科

[理念]人間と自然の調和的な共存を図るため、生物圏におきている現象の科学的な解明と問題の解決を通して、人類の福祉と平和に貢献する教育と研究を推進する。

[目標]生物圏科学研究科は、以下の教育と研究を実践し、地域・国際社会における応用生物学・環境学系の高度専門技術者・研究者として、時代と社会の要請に応え得る人材を養成する。

- 1) 自然と調和する持続的な生物生産活動の創出と展開
- 2) 生物機能・生物資源の活用とその高度利用技術の開発
- 3) 生物圏内の循環系を評価・予測・制御する技術の開発

[教育目的]

生物圏科学研究科は、自然と調和する持続的な生物生産活動の創出と展開、生物機能・生物資源の活用とその高度利用技術の開発及び生物圏内の循環系を評価・予測・制御する技術の開発に関する教育・研究を実践し、主に応用生物学・環境学系の高度専門技術者・研究者として、時代と地域・国際社会の要請に応え得る人材を養成する。

教育の特徴

- ・1単位科目をベースにしたカリキュラム編成により、多様な学生が自らの知識、能力、関心に応じて専門領域でステップアップし、ゼネラリストやスペシャリストとしての成長を促す。
- ・英語による研究成果の発信や外国人教員の採用、国際サマースクール開催等による海外の学生との交流を通して研究力と国際性を涵養する。
- ・ラボラトリーワークとフィールドワークにまたがる実験実習科目等を開講し、社会の多様な課題に対応し、また高度な研究技術を習得できる体制を構築している。
- ・企業の若手研究者との交流会を開催や、院生が主催する学術シンポジウムを支援するなどにより、院生の主体性と産業界理解を養っている。

想定する関係者とその期待

1. 入学希望者:

広島大学及び西日本を中心とした他大学の出身者、アジアの大学農学系学生・若手教員、企業研究所・公的機関の試験場研究員などを想定。

2. 在学生:

生物圏を広く捉えて食料・環境・応用生命科学の領域を学びたい院生を想定。専門領域の学習歴の多少にかかわらず、直実にこの領域の知識と研究力を修得することに応える。

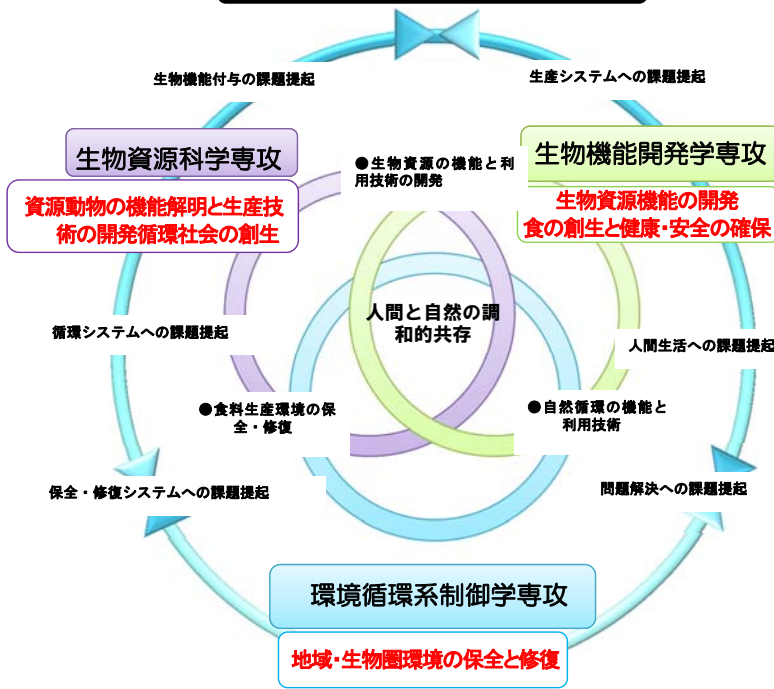
3. 修了生の受け入れ社会:

農水産分野の大学や公的試験研究機関や団体、食品や製薬分野の民間企業で、専門技術者や研究者として受け入れられることを想定。専門的知識と研究力を有するだけでなく、生物圏の俯瞰的視野のもとで持続可能な生産活動の意識をもった人材として貢献するという期待に応える。

1. 教育組織編成

資料2

3専攻の役割と相互関係



専攻	講座
生物資源科学	陸域動物生産学
	水圏生物生産学
	食料資源経済学
	瀬戸内圏フィールド科学
生物機能開発学	分子生命開発学
	食資源科学
環境循環系制御学	環境予測制御論
	環境評価論
生物生産学部附属練習船豊潮丸	

2. 学生の受け入れ

博士課程前期課程 (各年度11月1日現在)

専攻名	入学定員	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度
生物資源科学専攻	30	33	26	21	28
		110.0%	86.7%	70.0%	93.3%
生物機能開発学専攻	24	35	30	37	36
		145.8%	125.0%	154.2%	150.0%
環境循環系制御学専攻	19	20	10	19	15
		105.3%	52.6%	100.0%	78.9%
合計	73	88	66	77	79
		120.5%	90.4%	105.5%	108.2%

博士課程後期課程 (各年度11月1日現在)

専攻名	入学定員	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度
生物資源科学専攻	12	13	11	7	12
		108.3%	91.7%	58.3%	100.0%
生物機能開発学専攻	12	7	4	5	7
		58.3%	33.3%	41.7%	58.3%
環境循環系制御学専攻	9	5	9	5	1
		55.6%	100.0%	55.6%	11.1%
合計	33	25	24	17	20
		75.8%	72.7%	51.5%	60.6%

上段：現員数 下段：定員充足率

資料12:外国人留学生数の推移

博士課程前期入学年度別留学生数

地域名	22年度	23年度	24年度	25年度
アジア・中近東	7人	5人	6人	6人
アフリカ	1人			
合計	8人	5人	6人	6人

博士課程後期入学年度別留学生数

地域名	22年度	23年度	24年度	25年度
アジア・中近東	10人	7人	7人	6人
アフリカ		1人	3人	4人
合計	10人	8人	10人	10人

学生便覧・シラバスの英語化、
英語による授業の増加等

別添資料19:社会人院生数の推移

博士課程前期(各年度5月1日) *は旧専攻

専攻	22年度	23年度	24年度	25年度
生物資源科学	1	1	1	2
生物機能開発学	0	0	0	0
環境循環系制御学	0	0	1	1
合計	1	1	2	3
割合(%)	0.6	0.6	1.4	4.7

博士課程後期(各年度5月1日)

専攻	22年度	23年度	24年度	25年度
生物資源科学	15	16	18	15
生物機能開発学	5	6	7	5
環境循環系制御学	9	7	6	5
生物圏共存科学*	5	2		
生物資源開発学*	3	2		
合計	37	33	31	25
割合(%)	39.8	34.0	40.3	36.7

長期履修制度、通学費支援等

1. 教育内容・方法

専攻

生物資源科学専攻

生物資源の利用による食料生産

生物機能開発学専攻

応用生命科学的な生物の機能開発

環境循環系制御学専攻

持続的な生物生産活動を支える生物圏環境

研究科全体

生物圏を俯瞰できる応用生物学・環境学系の高度専門技術者・研究者を養成する教育体系

学位

修士(農学), 修士(学術),
博士(農学), 博士(学術)

別添資料12:履修方法

博士課程前期

1. 必修科目 10単位
2. 選択必修科目 12単位
 - ・大学院基礎科目より1科目 1又は2単位
 - ・コア科目より
 - ・演習 2単位
 - ・実習 1単位
 - ・上記以外のコア科目 8単位
3. 選択科目 8単位以上

必修科目: 特別研究(8単位)と共同セミナー(A)(2単位)

選択必修科目: 大学院基礎科目と専攻コア科目の講義、主指導教員指定の演習・実験実習

選択科目: 研究科内外の科目

博士課程後期

1. 必修科目 2単位
2. 選択必修科目 2単位
 - ・演習 2単位
3. 選択科目 4単位以上

必修科目: 共同セミナー(B)(2単位)

選択必修科目: 主指導教員指定の演習

選択科目: 研究科内外の科目

別添資料16 平成26年度 前期(A) 生物圏科学研究科授業時間割

曜日	時間	生物資源科学専攻	生物環境開発学専攻	環境循環系制御学専攻
月	1-2	分子内分泌学(島田): C309	水圏毒物学(浅川): C308 生態毒物学(大村): 総K208	
	3-4	基礎家畜飼養学(谷口・小堀): C308 水産資源生物学(高山): C309	天然生物活性物質学Ⅰ(太田): 総K207	
	5-6			
	7-8			
	9-10			
火	1-2	栽培漁業学入門(長澤): C309	食資源物理学Ⅰ(上野): C308 免疫生物学(古澤): C310 家畜生化学(加藤): C201	植物養分循環評価学入門(富永): C205
	3-4	家畜環境管理学(星後): B516 水産感染症学(中井): C315 食料資源管理学(山尾): B211	食品物性工学(川井): C308	微生物環境評価演習(和崎): C309
	5-6			
	7-8			
	9-10			
水	1-2	General Biosphere Science (1) (Liao): B209		
	3-4	家畜生体機構学(吉村・橋本): C310 食料消費経済学(田中): B211 家畜育種学(都築): C301	水圏生物資源化学(堀): C308 植物分子生命科学(江坂): C308	海洋生態系評価学入門(上): C309
	5-6			
	7-8			
	9-10	Practical work on writing reports and presentation (1) (Liao): B209		
木	1-2	飼料生物学(河合): C309		植物栄養生態学(美園): C310
	3-4	科学討論演習(吉田): C310	基礎分子生物学(水田): C308 食品衛生微生物学Ⅰ(中野): C309	気水圏物質循環Ⅰ(佐久川): 総J303
	5-6			
	7-8			水圏生態環境学入門(山本): C309
	9-10			温暖化・物質循環学入門(戸田): 総J302
金	1-2	人間動物関係学(谷田): C309	動物資源生化学Ⅰ(田辺): C308 生体分子科学A(手島): 総J303	
	3-4	水圏分子生物学入門(国吉): C201	遺伝子機能構造学概論(清水): 総J301	
	5-6			
	7-8			海洋生態系数値解析学本編(橋本): C310
	9-10			
集中講義		陸域動物生産学実験実習 食料資源経済学実験 家畜生殖補助利用学実験実習(前田・島田)	分子生命開発学実験 食資源科学実験	環境予測制御演習 環境評価演習

専門基礎科目
 専門科目
 実践科目

①幅広く受講できるカリキュラム

1単位を基本とする多様な科目を開設。専門を十分に学んでない学生に配慮した「専門基礎科目」と専門性を高めた「専門科目」、課題への取り組み力を高める「実践科目」、研究基礎技術を習得する「実験実習科目」を設定。

②演習・実験の充実

専門的な課題探究・解決力を培うために演習・実験等を開設。

③共同セミナー

生物圏科学と関連領域の幅広い科学知識を身に付けるという趣旨(必修科目)。

④英語で行う講義・演習

英語による授業は27科目提供できるように設定し、外国人特任教授による講義・演習を含む。

大学院生の国際化を促す取組



資料13 院生の国際交流事業開催実績

事業名称	参加	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度
研究科国際サマースクール	人数	8人	9人	9人	11人
	大学数	4	7	5	6
INU国際サマースクール	人数		32人	29人	28人
	大学数		9	9	9

資料14 院生の海外派遣実績

事業名称	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度
国際会議等発表	17人	5人	5人	10人
組織的な若手研究者等海外派遣プログラム(理工農系)	7人 (2)	3人 (1)	7人 (2)	事業終了

()内は1—6月間の海外インターンシップ派遣数で内数。

資料15 院生論文の英文校閲支援実績

課程	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度
博士前期	4人	2人	2人	8人
博士後期	8人	13人	2人	12人
計	12人	15人	4人	20人

資料21 学生支援の実績

支援等		平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
授業料免除	前期	35	41	37	39
	後期	35	33	32	32
エクセレントスチューデントスカラーシップ		6	5	5	8
リサーチ・アシスタント (RA)		30	31	21	22
論文の英語校閲		12	15	4	20
海外派遣 (研究科支援分)		17	5	5	10
社会人通学支援		2	10	8	5
各種奨学金受給状況		57	47	53	50

資料23-1 博士課程前期修了者数の推移

専攻	22年度	23年度	24年度	25年度
生物資源科学専攻	30	32	24	16
生物機能開発学専攻	40	33	30	35
環境循環系制御学専攻	7	17	10	16
計	77	82	64	67

資料23-2 : 博士課程後期修了者数の推移

専攻	22年度	23年度	24年度	25年度
生物資源科学専攻	12	7	11	4
生物機能開発学専攻	4	6	3	4
環境循環系制御学専攻	5	9	6	0
※生物圏共存科学専攻	4	1	0	0
※生物資源開発学専攻	1	1	0	0
計	26	24	20	8

※改組前の旧専攻の修了者

資料24-1 院生の学会発表数の推移

専攻	M/D	※22年度	23年度	24年度	25年度
生物資源科学専攻	M	46	16	19	46
	D	43	36	19	16
	計	89	52	38	62
生物機能開発学専攻	M	47	33	41	51
	D	16	10	6	14
	計	63	43	47	65
環境循環制御学専攻	M	25	7	15	12
	D	37	10	6	6
	計	62	17	21	18
総計 (在学生計)		214 (284)	112 (256)	106 (224)	145 (223)
一人当たり発表数		—	0.44	0.47	0.65

※学会発表の22年度はダブルカウント

資料24-2 院生の論文数の推移

専攻	M/D	22年度	23年度	24年度	25年度
生物資源科学専攻	M	5	13	5	14
	D	16	26	22	32
	計	21	39	27	46
生物機能開発学専攻	M	5	5	2	6
	D	12	13	10	11
	計	17	18	12	17
環境循環制御学専攻	M	5	1	1	4
	D	8	14	17	5
	計	13	15	18	9
総計	M	15	19	8	24
	D	36	53	49	48
	計	51	72	57	72
後期課程 (D) 一人 あたりの論文数	D在学生	(111)	(98)	(77)	(68)
		0.32	0.54	0.64	0.71

資料26 院生があげた顕著な学業成果

学年	賞の名称	授与年月日
博士課程後期2年	第13回マリンバイオテクノロジー学会大会 優秀ポスター賞	平成22年5月29日
博士課程前期1, 2年 (3名)	日本食品工学会第11回年次大会 優秀口頭発表賞	平成22年8月19日
博士課程後期2年	The 2010 Awards of the Dimitris N. Chorafas Foundation	平成22年
博士課程後期2年	第1回(平成22年度)日本学術振興会 育志賞	平成23年2月1日
博士課程後期3年	(社)日本土壌肥料科学会 2011年度つくば大会ポスター賞	平成23年8月9日
博士課程前期2年	日本食品工学会第12回年次大会優秀口頭発表賞	平成23年8月6日
博士課程前期1年	日本食品工学会第12回年次大会 優秀ポスター発表賞	平成23年8月6日
博士課程後期	Journal of Poultry Science Outstanding Paper Award	平成23年8月25日
博士課程後期3年	The 2011 Awards of the Dimitris N. Chorafas Foundation	平成23年
博士課程後期2年	2011年度 水産海洋学会 研究発表大会・講演賞	平成23年11月12日
博士課程前期2年	日本食品工学会年次大会 優秀口頭発表賞	平成24年9月10日
博士課程後期3年	日本畜産学会奨励賞	平成25年3月28日
博士課程後期3年	The Best Student Poster Presentation Award	平成25年6月7日
博士課程後期2年	日本家禽学会優秀発表賞	平成25年9月8日
博士課程前期1年(2名)	日本動物遺伝育種学会・学会長特別賞	平成25年10月12日
博士課程前期2年	学生奨励賞	平成25年10月11日
博士課程前期2年	第31回 YEAST WORKSHOP ポスター賞	平成25年11月2日
博士課程前期1年	日本食品工学会年次大会 ポスター賞	平成25年8月10日
博士課程前期2年	第四十六回日本栄養・食糧学会 中国・四国支部大会 学生奨励賞	平成25年11月17日
博士課程前期1年(2名)	日本DNA多型学会優秀研究賞	平成25年11月22日
博士課程後期3年	平成25年度岩手県三陸海域研究論文 学生の部 岩手県知事賞	平成25年12月12日
博士課程前期2年(2名)	日本サンゴ礁学会第16回大会最優秀ポスター賞	平成25年12月14日
博士課程前期2年	日本農芸化学会中四国支部学生奨励賞	平成26年3月1日

院生の受賞状況

年度	受賞回数
H22	4
H23	6
H24	2
H25	11

資料27：学生評価アンケート（1）

問2）生物圏科学研究科博士課程前期の講義科目は満足できましたか？

評価	24年度 M2年生		25年度 M2年生	
	大変満足	12	23.1%	7
ほぼ満足	35	67.3%	30	66.7%
多少不満	5	9.6%	7	15.6%
大変不満	0	0%	1	2.2%

資料28：学生評価アンケート（2）

問12）修士論文研究は満足できましたか？

評価	24年度 M2年生		25年度 M2年生	
	大変満足	17	33.3%	17
ほぼ満足	23	45.1%	15	33.3%
多少不満	9	17.6%	9	20.0%
大変不満	2	3.9%	4	8.9%

資料29：学生評価アンケート（3）

問15）指導を受けた修士論文研究は今後役立つと思いますか？

評価	24年度 M2年生		25年度 M2年生	
	大変満足	22	42.3%	21
ほぼ満足	24	46.2%	17	37.8%
多少不満	5	9.6%	3	6.7%
大変不満	1	1.9%	4	8.8%

資料30 博士課程前期学生の進路状況

進路	平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度	
修了者	77人		82人		64人		67人	
進学者	7人	9.09%	8人	9.76%	12人	18.75%	12人	17.91%
就職者	62人	80.52%	63人	76.83%	50人	78.13%	48人	71.64%
就職率(%)*		88.6%		85.14%		96.15%		87.27%

*就職率は、修了者-進学者=就職希望者 就職者/就職希望者×100=就職率 (%)

	平成22年度			平成23年度			平成24年度			平成25年度		
	人数	うち留学生	%	人数	うち留学生	%	人数	うち留学生	%	人数	うち留学生	%
農林水産業	3		4%	2		2%	2		3%			0%
建設・運輸業	1		1%			0%			0%			0%
食品・飲料・飼料	12		16%	8		10%	14	1	22%	14	1	21%
化学工業・医薬品	9		12%	5		6%	8		13%	6		9%
一般機械器具			0%	2		2%			0%	2		3%
輸送用機械器具			0%			0%			0%			0%
精密機械器具・医療用機械器具			0%			0%			0%			0%
その他の製造業	2		3%			0%			0%	1		1%
情報通信業			0%	5		6%	2		3%	4		6%
運輸業	1		1%			0%			0%	1		1%
卸売業	1		1%	2		2%	2		3%	4		6%
小売業	6		8%	2	1	2%			0%	1		1%
金融・保険業			0%			0%	1		2%	2		3%
医療業・保健衛生	4		5%	4		5%	2		3%			0%
不動産業			0%			0%			0%			0%
飲食店・宿泊業	1		1%	1		1%			0%	1		1%
教育(大学)			0%			0%			0%			0%
教育(小・中・高等学校)			0%	3		4%	1		2%			0%
大学(研究員)			0%			0%			0%			0%
その他の教育・学習支援業	2		3%			0%	2		3%	1		1%
総合・その他	10		13%	10		12%	5		8%	7		10%
学術・開発研究機関	1		1%			0%	2		3%			0%
国家公務	1		1%			0%			0%			0%
地方公務	8		10%	18		22%	9		14%	4		6%
当研究科博士課程後期	7	1	9%	7	4	9%	12	5	19%	10	2	15%
進学(他研究科/他大学/留学)			0%	1		1%			0%	2		3%
自営業・家業継承(農業ほか)			0%	1		1%			0%			0%
起業			0%			0%			0%			0%
その他(未定含む)	8	2	10%	11	1	13%	2	1	3%	7	1	10%
合計	77	3		82	6		64	7		67	4	

資料31 博士課程後期修了者の進路状況

	平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
大学の教員(※助教・講師等)	8	30.8%	4	16.7%	4	20.0%	2	25.0%
公的な研究機関	3	11.5%	5	20.8%	4	20.0%	0	0.0%
その他の公的機関	1	3.8%	4	16.7%	4	20.0%	1	12.5%
企業(研究開発部門)	2	7.7%	1	4.2%	4	20.0%	0	0.0%
企業(その他の職種)	4	15.4%	3	12.5%	2	10.0%	0	0.0%
ポスドク(同一大学)	2	7.7%	0	0.0%	2	10.0%	1	12.5%
ポスドク(他大学)	3	11.5%	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%
進学(留学等)	0	0.0%	1	4.2%	0	0.0%	0	0.0%
その他	3	11.5%	6	25.0%	0	0.0%	2	25.0%
計	26		24		20		8	

教育実施体制

- ・生物資源科学専攻, 生物機能開発学専攻, 環境循環系制御学専攻の3専攻を維持して, それぞれの特色を活かした教育を行うという研究科の**目的に沿った教育研究**を行っている。
- ・第3期中期目標計画期間を見据えた**教員確保の将来構想**と人事計画の立案が強く望まれる。
- ・博士課程前期の定員充足率は, 研究科全体としては良好であるが, 専攻によって100%を割っている年度があり, 後期の定員充足率は低い状態が続いている。とくに**後期課程の充足率を上げる方策の検討が必要**である。

教育内容・方法

- ・1単位を基本に多様な科目を提供していることは, **学習歴が異なる多様な学生に対して, 有効な教育方法**として評価できる。
- ・TOEIC受験推進は教育の国際化に効果的で, さらに「研究科国際サマースクール」の開催, 「院生の国際会議での発表や海外インターシップ」の推進は, 院生の**国際性の修得**に効果があると評価できる。
- ・学生便覧と全科目のシラバスを英語版の作成していること, **英語による授業科目数を増加**させていることは, 優秀な留学生を積極的に多く受け入れるための優れた取り組みとして効果を期待する。

学業の成果

- ・平成23年度から25年度までに, 博士課程前期・後期院生全体による学会発表数と論文発表数も増加傾向を示していることから, **院生の学術成果に向上**があり, 発表力も高まっていること, また学位論文の質を一定程度保証していることを示すと評価される。
- ・「第1回(平成22年度)日本学術振興会 育志賞」をはじめとし, 各種の学会関連の賞を**受賞した院生が増加傾向**を示しており, 院生の研究活動の学界・社会からの評価が高まっていると考えられる。
- ・修了時アンケートで示された, 「**講義**」と「**修士論文研究**」の**満足度が高い**ことは教育の取り組みとして良好とは判断される。

就職の状況

- ・博士課程前期修了生の主な就職先は, 食品・農業関連, 医薬品等のバイオ産業関連, そして地域の農林水産業に貢献する公務員で, 研究科が目的とする「**食料生産, 応用生命, 環境保全の分野で高度な知識をもった専門技術者の養成**」の**成果**が表れていると評価できる。
- ・博士課程後期修了生は, 大学教員, 公的な研究機関への就職が多く研究科の教育目的である「**食料・生命・環境分野の研究力や高度な技術力**」を**活かしている**と思われる。今後, 大学院生数を増加させる施策を早急に講じ, 安定的な学生確保を図るとともに, 修了生の将来的な研究職・技術職の獲得を支援するために, 学内ポスドクの確保・充実も期待される。

生物生産学部の教育

資料1 広島大学と生物生産学部の理念

広島大学の理念5原則

●平和を希求する精神, ●新たなる知の創造, ●豊かな人間性を培う教育, ●地域社会・国際社会との共存, ●絶えざる自己変革

生物生産学部の理念

●生物圏の環境保全, ●環境に調和した食料の生産, ●健康で豊かな食の創成, ●生物資源に関わる知の創造, ●地域と国際社会への貢献

[教育目的]

環境と調和した持続可能な食料生産及び生物資源の活用を目指し, 生物及び環境に関わる農学領域の知の継承と創造を通して教育研究を行うことにより, この領域の科学的知識と地球規模の広い視野をもって活躍し, 社会に貢献し得る人材を養成することを目的としている。

教育の特徴

- ・生物圏環境学, 水産生物科学, 動物生産科学, 食品科学, 分子細胞機能学の5つの主専攻プログラムを編成し, 質保証を目指した到達目標型教育プログラム「HiPROSPECTS(R)」による体系的な教育を実施している。
- ・各主専攻プログラムでは, 2年次前期までは, 教養教育科目や学部共通の専門基礎科目を履修して教養と生物生産領域を幅広く学び, 2年次後期からは専門科目を学んで, 到達目標を満たす。
- ・課題探究力や問題解決力を身につけるために, 生産現場での実践を重視したフィールド教育を充実させている。このため, 付属施設での実験実習や卒業論文研究を積極的に取り入れているほか, 中国・四国地区国公立農学系学部単位互換制度による「フィールド演習」, 「地(知)の拠点整備事業(COC事業)」等を通して, フィールドワーク・インターンシップ等の教育活動を推進している。
- ・海外演習や協定校との交流等を行うとともに, 研究者養成特別コースの海外実習, AIMS-HUプログラムによる交換留学, 全学の留学プログラムのSTARTプログラムや短期交換留学プログラムを提供しグローバル化に対応した教育を推進。外国人教員を積極的に雇用又は招へいし, 国際的視野に立った専門領域の講義を提供できるよう努めている。

想定する関係者とその期待

1. 入学希望者及び保護者:

西日本を中心とした高校生とその保護者及び社会人を想定。

2. 在学生:

環境と調和した持続可能な食料生産及び生物資源の活用を学びたいという学生を想定。2年次前期までは教養教育と専門基礎科目を中心に学び, その後に専門コースを選択する一連の過程により, 生物圏の環境と生物生産活動の領域を幅広く学んだうえで専門学修を深化させるという期待に応える。フィールド教育を通し, 現場において課題を発見し, 解決策を見出す実践力を身につけるという期待にも応える。

3. 卒業生の受け入れ先:

農学・生命系の大学院, 国や地方の農水産業関係公務員や団体, 食品や製薬等の企業, 農水産業を想定。幅広い視野の下に深い専門知識を持って持続可能な生物生産活動を実現できる人材を育成するという期待に応える。

資料2 主専攻プログラム

○生物圏環境学プログラム

生物圏における食料の生産から消費にいたる人間的営みに着目しながら、陸域の植物生産と水域の環境や低次生産、生態系の構造と機能について総合的に教育し、**生物圏の食料・生物生産機能と環境保全機能の向上に貢献できる人材を養成する。**

○水産生物科学プログラム

海洋生物資源の有効利用を図るために、水産資源の再生産機構の解明及び新しい増養殖・放流技術の開発に関わる基礎的及び応用的教育を行い、関連する幅広い分野で、問題解決能力を持って活躍できる人材を養成する。

○動物生産科学プログラム

動物の機能と生産に関わる科学的な基礎知識と実践的技術を幅広く教育し、家畜の近代的生産や動物を応用する分野において、教養と応用展開能力を身につけて国際的な広い視野で活躍できる人材を養成する。

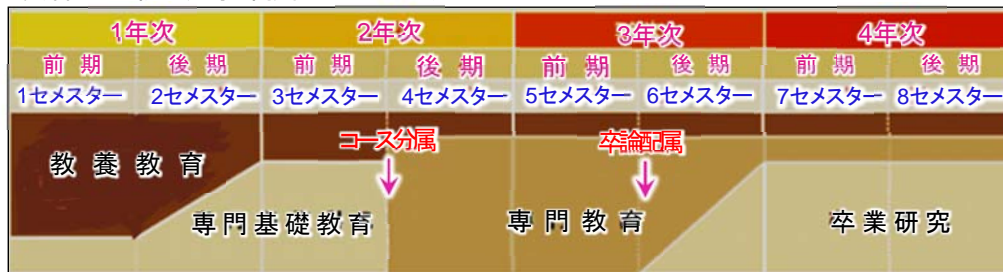
○食品科学プログラム

安全で高品質・高機能な食品の開発・製造及び生物資源の機能解析と有効利用に関する基礎知識と技術を総合的に教育し、広い視野から健康で豊かな食生活の創成に貢献できる人材を養成する。

○分子細胞機能学プログラム

微生物や動物、植物のもつ生物機能を遺伝子や蛋白質、有機物などの生体分子の視点から解き明かし、細胞や細胞内の小器官を生体分子の集合体として特徴づけながら、分子が織りなす細胞や生物個体の生命現象を理解し、**生物資源の開発や有効利用、食料や環境等への応用**へと貢献できる人材を養成する。

資料3 生物生産学部教育のカリキュラム



資料8 入学希望者の状況

	前期		後期		フェニックス		AO入試		入学者数	定員	充足率(1)
	定員	志願者数	定員	志願者数	定員	志願者数	定員	志願者数			
22年度	65	140	10	44	若干名	3	15	63	93	90	103.3
23年度	65	181	10	108	若干名	0	15	25	107	90	118.9
24年度	65	183	10	74	若干名	4	15	50	107	90	118.9
25年度	65	194	10	91	若干名	2	15	46	107	90	118.9

	個別倍率		
	前期入試	後期入試	AO入試
21年度	2.6	6.5	2.5
22年度	2.2	4.4	4.2
23年度	2.8	10.8	1.7
24年度	2.8	7.4	3.3
25年度	3.0	9.1	3.1

資料9 入学者の出身地域

九州地方	中国地方	四国地方	近畿地方	中部地方	関東地方	東北地方	北海道	合計
25	44	11	18	9	2	1	0	110
22.7%	40.0%	10.0%	16.4%	8.2%	1.8%	0.9%	0%	

資料 10 履修要項

卒業要件単位数 128 単位 (全コース共通)
 教養科目：48 単位 (内, 基盤科目の単位数：12)
 専門基礎科目：24 単位
 専門科目：56 単位 (プログラムによって必修の数は異なる)
 (各コース専門科目)

プログラム名	専門科目の必修の単位数	専門科目の選択必修の単位数	専門科目の選択科目の単位数
生物圏環境学プログラム	24	10	22
水産生物科学プログラム	30	14	12
動物生産科学プログラム	28	16	12
食品科学プログラム	24	10	22
分子細胞機能学プログラム	31	12	13

学位： 学士(農学)

別添資料13 主専攻プログラム到達目標の例

	プログラム名	到達目標	参加教育科目
主専攻プログラム	動物生産科学プログラム	1. 自然科学および社会科学についての幅広い教養と, 生物学, 化学, 数学および物理学の基本的な知識, 日本語と英語による基本的なコミュニケーション能力を身につける。 2. 生物資源と食料生産, バイオテクノロジー, 生物環境の保全に関する幅広い基礎的知識, および生物生産におけるフィールド科学分野の経験を有するとともに, 科学者・技術者倫理を理解する。 3. 動物を生産・利用する上で必要な遺伝育種, 生殖, 飼養, 管理, 生体機構, フィールド科学の基本的な知識と研究手法を体系的に修得し, その知識を実践化することができる基礎力を備える。 4. 動物資源の食料生産における役割と動向, 人間生活への活用, 自然環境との関わり等を国際的な範囲まで洞察して, 動物生産の課題を解決するための基礎的能力を身につける。 5. 自分の考えを文章や口頭で論理的に発表できる基礎的能力を身につける。	家畜育種遺伝学
			家畜生殖学
			家畜飼養学
			家畜管理学
			家畜生体機構学
			陸域生物圏部門

教育課程編成の学生・社会のニーズ・教育課程編成のグローバル化

資料11 学生の多様なニーズ等に応える科目履修者人数

プログラム名	履修者人数				
	H22	H23	H24	H25	H26
海外演習	—	13	15	40	20
乗船実習	18 (1)	19 (1)	11	12 (1)	17(1)
中国・四国地区国公立大学農学系学部単位互換制度による連携フィールド演習	24	48	43	80	123
研究者養成特別コース	—	—	9	12	12
地（知）の拠点プログラム	—	—	—	準備年	104

*1海外演習はフィリピン大学とビザヤ州立大学（フィリピン）で実施。

*2乗船実習は釜慶大学，全南大学，全羅南道・海洋バイオ研究所，済州大学等を訪問。

*3（ ）内は大学院生でTAとして参加

資料12 海外派遣プログラムの参加人数

プログラム名	履修者人数				
	H22	H23	H24	H25	H26
短期留学（HUSA等）	0	6	12	16	13
AIMSプログラム	—	—	—	準備年	9

*HUSA=広島大学短期交換留学

*AIMS= ASEAN International Mobility for Students Programの略でタイ国カセサート大学へ派遣

2. 教育方法

別添資料31 教育関係外部資金の獲得状況

教育改革支援事業等名称	取組名(プロジェクト名称)	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
		第2期						第3期		
理数学生育成支援事業	理数学生育成プログラム(広島大学型アクティブラーニングによる研究者養成特別コースプログラム)									
大学の世界展開力強化事業【AIMSプログラム】	アジアの共同経済発展と信頼関係の確立による平和構築に貢献する中核人材									
地(知)の拠点整備事業	平和共存社会を育むひろしまイニシアティブ拠点									
教育関係共同利用拠点	食料の生産環境と食の安全に配慮した循環型酪農教育拠点									
	食料の生産環境と食の安全に配慮した循環型酪農教育拠点(再認定)									
	瀬戸内海における里海学フィールド教育拠点(広島大学大学院生物圏科学研究科附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター竹原ステーション(水産実験所))									
	瀬戸内海における洋上里海教育のための共同利用拠点(教育拠点(広島大学生物生産学部附属練習船豊潮丸))									

* 網掛け:事業実施期間、矢印(実線):文部科学省等経費支援期間、矢印(点線):学長裁量経費支援期間

資料 19 資格取得状況

(免許)

取得年度	高等学校教諭一種免許状(1)	受講者に対する資格取得率(1)
22年度	1名	100%
23年度	14名	100%
24年度	13名	100%
25年度	7名	100%

(資格)

取得年度	学芸員	食品衛生管理者	食品衛生監視員	家畜人工授精師免許資格
22年度	4名	63名	63名	16名
23年度	20名	85名	85名	17名
24年度	30名	68名	68名	14名
25年度	10名	54名	54名	13名

※学芸員，食品衛生管理者/食品衛生監視員は，所定の科目を履修し単位を修得した学生数。

資料 22 授業評価総合平均点の年度変化

年度	学部授業評価アンケート総合評価点
H22	3.45
H23	3.47
H24	3.37
H25	3.39

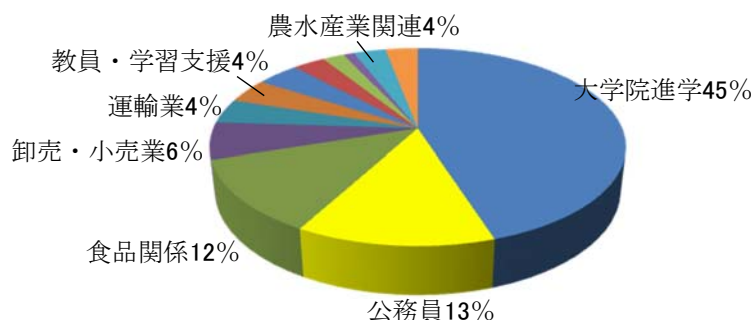
資料 23 学生が身に付けた学力や資質・能力に関するアンケート結果

学力や資質・能力に対して	満足と判断した人の割合	回答者数
平成 24 年度学部教育アンケート(4 年生)	84.5%	58
平成 25 年度学部教育アンケート(4 年生)	80.4%	46
平成 23 年度学部 4 年生との懇談会	80%	10
平成 22 年度卒業生との意見交換会	75%	8
平成 24 年度卒業生との意見交換会	80%	10

資料 24 進学率と就職率

	学部卒	
	大学院進学率(1)	就職確定率（就職希望者あたりの採用率）(1)
平成 22 年度	56%	93%
平成 23 年度	45%	97%
平成 24 年度	52%	96%
平成 25 年度	52%	96%

資料25 職業別・産業別就職状況（平成23年度）



資料 26 関係企業のアンケート結果より抜粋

質問（9）各コースの主専攻プログラムの教育内容は、社会的な要請に合致していると思われませんか。

評価	生物圏環境学 プログラム	水産生物科学 プログラム	動物生産科学 プログラム	食品科学 プログラム	分子細胞機能学 プログラム
合致している	13	12	12	14	12
ほぼ合致している	7	8	11	7	10
あまり合致していない	2	2	1	1	0
全く合致していない	0	0	0	0	0

広島大学生物生産学部の教育目標、教育の実施体制、教育内容・方法などについての企業からのコメント

- ・生命科学を追求することで得られる知識情報が臨床に繋がるので、マッチしている。
- ・「食」の生産や確保は今後極めて重要なテーマになることは確実なので、これらに関する研究の社会貢献度はなお高まると考えます。
- ・どのプログラムも社会で必要とされていると思います。

資料 27 教育内容・教育方法の改善体制に関するアンケート結果

教育内容・教育方法の改善体制に対して	満足と判断した人の割合	回答者数
平成 24 年度学部教育アンケート(4 年生)	82.8%	58 人
平成 25 年度学部教育アンケート(4 年生)	78.3%	46 人
平成 23 年度学部 4 年生との懇談会	59.3%	27 人
平成 22 年度 4 年生保護者アンケート	87.5%	24 人
平成 24 年度 4 年生保護者アンケート	71.4%	35 人
平成 22 年度卒業生との意見交換会	75%	8 人
平成 24 年度卒業生との意見交換会	90%	10 人
平均	77.8%	総数 208 人

教育実施体制

- ・生物圏環境学，水産生物科学，動物生産科学，食品科学，分子細胞機能学の5つの主専攻プログラムを編成し，それぞれ「到達目標型教育プログラム」を取り入れていることは，学生の到達すべき目標を学生と社会へ明確に示すことで教育の質を保証する有益な仕組みであると評価している。

教育内容・方法

- ・**フィールド教育**は実践・体験により学生の課題発見・解決力を養う教育の充実につながると考えられ，学内附属施設に加えて，本学部が主幹校となっている「中国・四国地区国公立大学農学系学部単位互換制度による連携フィールド演習」や新たに採択された「地(知)の拠点整備事業(COC事業)」等で，これまで以上に充実されると考えられる。
- ・国際交流協定締結校の協力の下で実施している「海外実習」，「海外演習」，今後予定されている「AIMS-HUプログラムによる短期交換留学」，そして外国人教員及び外国人招へい教員による講義・演習の提供等は，**グローバル人材を育成するための先進的な取り組み**として評価できる。
- ・「研究者養成特別プログラム」，「地(知)の拠点整備事業(COC事業)」，「AIMS-HUプログラム」は，文部科学省にも認められたプログラムであり，また**学生の意欲に応じた多様なニーズに応える取り組み**として高く評価できる。
- ・これらの先進的かつ意欲的な教育取組を支えるための財政基盤としての**外部資金**の獲得実績は良好であり，他の農学系の大学と比べて優位性があると評価できる。

学業の成果

- ・本学部が力点をおいた取り組みの1つは**教育の国際化**であるが，多様な取組への参加状況から判断して，**グローバル人材へのモチベーションは高まっている**と推測できる。
- ・授業評価アンケートでは，学生の評価は3.4(4点満点)と良好で，卒業時アンケートでは修得した学力や資質への満足度も良好であったため，専門教育において**学生の期待に応えている**と判断できる。
- ・教育内容のアンケート結果は，就職先企業へのアンケートで90%以上，新入生，新入生保護者，在学生，卒業生から平均78%の満足度を得ているため，**社会の期待や要請**に概ね応えていると判断できる。

就職の状況

- ・卒業生のうち大学院博士課程前期進学者は約半数でやや少ないと評価する。進学希望者を増加させる取り組みが必要と思われる。
- ・就職率は希望者の9割以上が就職できるため良好で，大半の就職先は農水系公務員や農学系の専門性の高い分野の企業であり，**本学部の理念と目的のもとで学修した成果が学生の希望する就職先**へ繋がっていると高く評価できる。

生物生産学部・生物圏科学研究科の研究

1. 研究科の目的

生物圏科学研究科は、広島大学理念5原則(平和を希求する精神, 新たなる知の創造, 豊かな人間性を培う教育, 地域社会・国際社会との共存, 絶えざる自己変革)の下に, 人間と自然の調和的な共存を図るため, 生物圏においている現象の科学的な解明と問題の解決を通して, 人類の福祉と平和に貢献する教育と研究を推進することを目的としている。これにより, 生物圏を俯瞰し, **自然と調和する持続的な生物生産活動の創出と展開, 生物機能・生物資源の活用とその高度利用技術の開発, 生物圏内の循環系を評価・予測・制御する技術の開発**に関する研究を実践して, 地域・国際社会に貢献する。

資料2. 研究に関する広島大学の中期目標と生物生産学部・生物圏科学研究科の中期目標との対比

広島大学中期目標	生物生産学部・生物圏科学研究科中期目標
<p>2 研究に関する目標</p> <p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標</p> <p>① 自由で独創性の高い研究を推進しつつ, 個性ある学術分野において, 世界トップレベルの研究の達成を目指す。</p> <p>② 基盤的研究の維持・発展と萌芽的研究の育成, 異分野融合型の研究を発掘・育成する。</p> <p>③ 教員の研究活動及び研究業績に係る評価システムをより信頼性の高い評価システムに整備し, 研究水準の向上を図る。</p>	<p>2 研究に関する目標</p> <p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標</p> <p>① 自由で独創性の高い研究を推進しつつ, 個性ある学術分野において, 世界トップレベルの研究の達成を目指す。</p> <p>② 基盤的研究の維持・発展と萌芽的研究の育成, 異分野融合型の研究を発掘・育成する。</p> <p>③ 教員の研究活動及び研究業績に係る評価システムをより信頼性の高い評価システムに整備し, 研究水準の向上を図る。</p>

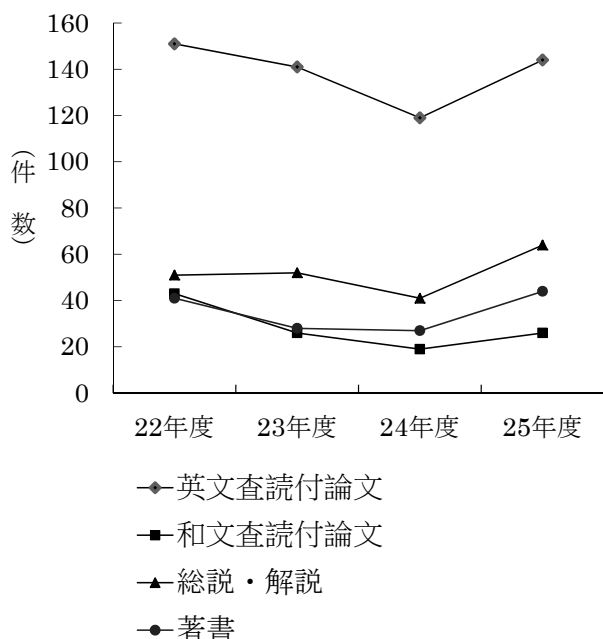
- ・動植物科学, 水産海洋科学, 食品科学領域の特色ある研究や先端的な研究実績を生かし, また環境科学等の生物圏科学諸分野の強みのある研究を推進し, 自由で独創性の高い研究を推進しつつ, 世界トップレベルの研究の達成を目指す。
- ・研究科主催の国際シンポジウム等を開催して研究交流を推進し, また国際会議や学術誌を通して研究活動を国際的に情報発信する。
- ・生物資源とその機能についての基礎から応用までの研究を行い, 基礎研究を生物生産の技術開発につなげる「トランスレーショナル型研究」を重視し, 国内外の試験研究機関との共同研究の増加と成果の知財権取得に努める。
- ・包括協定を締結した企業等の産業界との共同研究を推進し, また国や地方自治体の審議会等に積極的に参画し, 研究成果を地域や国内外の実社会に活かすことを推進する。

想定する関係者とその期待

1. 生物資源・食料・環境に関わる農水産分野の試験研究機関, 食品開発や製薬分野の民間企業, 環境産業, 瀬戸内圏を中心とする地方自治体, 生産者・消費者を主な関係者として想定している。
2. 生物生産・生物資源利用の新規技術開発, 食品開発, 国や地方自治体の審議会や評価委員会への参画による政策提言, 地域・国レベルでの農水産業や食品産業の振興, 自然環境の評価等への貢献を期待している。

1. 論文・著書等の研究業績

資料4 研究業績数



別添資料 2-2.

生物圏科学研究科の2010-2013年論文の掲載誌カテゴリーから見た研究分野 (Web of Science データ)

掲載誌の分野	論文数
AGRICULTURE (農学)	98
FOOD SCIENCE TECHNOLOGY (食品科学技術)	75
ENVIRONMENTAL SCIENCES ECOLOGY (環境科学・生態学)	64
BIOCHEMISTRY MOLECULAR BIOLOGY (生化学・分子生物学)	62
CHEMISTRY (化学)	59
MARINE FRESHWATER BIOLOGY (海洋・淡水生物学)	58
ZOOLOGY (動物学)	47
BIOTECHNOLOGY APPLIED MICROBIOLOGY (バイオテクノロジー・応用微生物学)	40
VETERINARY SCIENCES (獣医科学)	32
FISHERIES (水産学)	29
MICROBIOLOGY (微生物学)	25
PLANT SCIENCES (植物科学)	23

資料5 国際会議・学会での招待講演・発表および国内学会招待講演

種別	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H22-25年度	
						合計	平均
国際会議・国際学会招待講演	10	9	7	5	10	31	7.75
国際会議・国際学会一般発表	22	77	77	69	66	289	72.25
国内学会招待講演	37	48	31	15	48	142	35.50

資料6 学術賞等の受賞状況

種別	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H22-25年度	
						合計	平均
受賞学術賞・国外	0	0	2	0	1	3	0.75
受賞学術賞・国内	6	16	14	7	18	55	13.75
合計	6	16	16	7	19	58	14.50

European Lipid Technology Award (ヨーロッパ脂質工學賞)

第5回海洋立国推進功労者表彰、第68回中国文化受賞、日本農学進歩賞

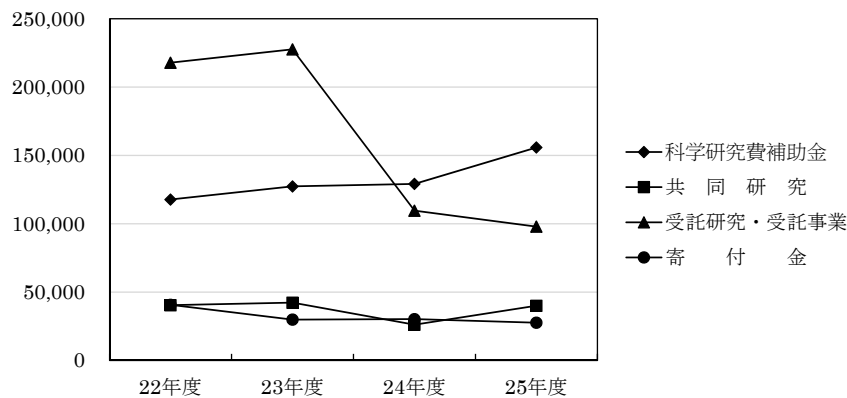
日本海洋学会賞、日本土壌肥料学会賞、園芸学会賞、日本栄養・食糧学会賞など

資料7-1 外部資金獲得状況

(単位：千円)

種類	H21年度		H22年度		H23年度		H24年度		H25年度		H22-25年度平均	
	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数
科学研究費補助金	144,235	41	117,788	41	127,361	43	129,210	44	155,870	54	132,557	45.5
共同研究	58,023	31	40,472	26	42,340	36	26,199	24	40,048	30	37,265	29.0
受託研究・受託事業	231,226	36	217,840	33	227,629	31	109,594	20	97,941	22	163,251	26.5
寄付金	31,991	52	40,767	52	29,929	51	30,306	54	27,685	52	32,172	52.3
合計	465,475	160	416,867	152	427,259	161	295,309	142	321,544	160	365,245	153.3

外部資金獲得状況 金額 (単位：千円)



資料8 知的財産権の特許出願・取得状況

出願・取得	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H22-25年度年平均
特許出願数	37	27	29	17	12	21.25
特許取得数	5	16	22	14	24	19

資料9 研究科長裁量経費での研究助成

(単位：千円)

研究助成名称	H21年度		H22年度		H23年度		H24年度		H25年度		H22-25年度 (年平均)	
	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数
萌芽的研究助成	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
プロジェクト研究	900	3	1,000	2	1,800	3	500	1	0	0	825	1.50
連携機関との共同研究プロジェクト	1,600	2	900	3	0	0	250	1	0	0	287.5	1
若手研究者支援	0	0	600	2	0	0	0	0	0	0	150	0.5
基盤研究サポート	0	0	900	3	1,500	5	300	1	900	3	900	3
計	2,500	5	3,400	10	3,300	8	1,050	3	900	3	2,162.5	6

資料12 広島大学地域貢献研究採択研究プロジェクト

(単位 千円)

	H21年度		H22年度		H23年度		H24年度		H25年度		H22-25年度 年平均	
	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数
広島大学 地域貢献 採択	10,786	5	10,020	4	1,676	1	721	1	1,932	1	3,587.25	1.75

研究課題

【平成22年度】

- ・希少鳥類の繁殖効率向上のための非侵襲性手法による性(雌雄)判別法の開発と実用化およびその手法の教育・普及活動の実現に向けた動物園・地域一体型の取り組みの実現
- ・食品素材としてのタコの機能性の解明とその食品開発への応用
- ・周防灘中津干潟におけるアサリ漁場の復活に向けた干潟・海洋調査
- ・野生生物による農業被害軽減という集落共通課題を通じた地域力の向上に関する研究

【平成23年度】

- ・魚類によるカキならびにアサリの食害防除に関する生物学的研究

【平成24年度】

- ・瀬戸内海島嶼部における女性を核とした広域連携による地域活性化の可能性

【平成25年度】

- ・帝釈峡神龍湖の水質悪化原因の究明と改善材適用による改善

資料13 行政・地方自治体・全国レベルの法人等の評価委員等の数

機関等	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H22-25年度年平均
大 学	26	24	31	30	33	30
国・地方公共団体	64	62	45	58	51	54
各種法人・その他	103	97	101	88	105	98
企業(営利企業含む)	15	8	14	12	9	11
合 計	208	191	191	188	198	192

【国家行政・独立行政法人】

農林水産省評価委員会・農作物野生鳥獣被害対策会議, 国土交通省中国地方整備局, 国立環境研究所等の審査会委員やアドバイザーボード委員などのほか, 日本学術会議連携会員・小委員会委員, 大学評価・学位授与機構学位審査会専門委員, 日本学術振興会, 日本技術者教育認定機構, 国際協力機構など。

【地方公共団体】

広島県農林水産部, 広島市環境局, 東広島市, 呉市等の審議会・協議会委員など。

【法人・組合等】

広島県農業協同組合教育審議会, 社団法人中央畜産会, 社団法人農林水産技術情報協会など。

資料3. 広島大学農学分野におけるミッションの再定義

海洋生物の調査, 免疫機能の応用, 繁殖技術の革新的改良, 食品の安全性と機能性の強化の特色ある研究や, 強みを有する動植物科学, 水産海洋科学, 食品科学領域の先端的な研究実績を活かし, 生物圏科学諸分野の研究を推進し, 研究プロジェクト拠点の形成や国内外研究機関との共同研究を通して, わが国及び世界的な学術研究の発展に寄与する。

別添資料12 生物生産学部・生物圏科学研究科ミッションの再定義「研究推進の方向性」資料

研究科の特色ある研究

- ・大型クラゲの海洋調査
- ・ニワトリ免疫機能の応用と感染防御機能の強化
- ・家畜繁殖技術の革新的改良
- ・食品の安全性と機能性の強化

- ・ **研究分野と成果** 論文が掲載された学術誌の分野から、動植物科学、水産海洋科学、食品・応用生命科学、環境科学等の**研究科が目的とする領域の研究**がおこなわれ、教員一人当たりの**論文数**は、第1期中期目標・計画期間最終年の平成21年度に比べて、第2期中期・目標期間中(平成22-25年度)に減少している。なお、平成25年度は英文論文を中心に増加傾向にあり、国際共著論文数についても第1期から第2期にかけて増加している。
- ・ **研究の質** 第5回海洋立国推進功労賞(内閣総理大臣賞)、中国文化賞、日本農学進歩賞等の優れた**表彰**を受けるとともに、大型外部資金獲得状況などから、質の高い研究を展開していると評価できる。
- ・ **研究成果の応用** 特許取得数は飛躍的に増加しており、研究科の特色の一つである「**基礎研究を生物生産の技術開発につなげる**トランスレーショナル型研究」を重視した研究を展開していると言える。
- ・ **社会貢献** 農林水産省等の公的機関からの受託研究や産業界との共同研究、地域貢献研究の実施状況、国や地方自治体の審議会等への参加状況も合わせて、研究科が特色とするグローバルな視点での研究を展開し、その**研究成果を地域や国内外の実社会に活かしている**といえる。

(注記)本説明資料に用いた資料の出典は、冊子「自己点検・評価報告書(第2期中期目標計画期間:中間まとめ)平成22年度～25年度」によるものとする(一部改編あり)。また、資料番号も冊子に準じた番号を付している。